

30P1-am123

理礼氏薬物学(第二卷)にみる薬物

○宮本 如奈¹, 林 優樹², 西野 ゆり³, 菰田 綾佳⁴, 森田 祐基⁵, 西野 正雄⁶, 乾 真由美⁷, 高倉 弘士⁸, 畠山 有理⁹(同志社大学文学部,²府立富田林高等学校,³府立長野高等学校,⁴府立藤井寺高等学校,⁵初芝富田林高等学校,⁶府立富田林高等学校,⁷大阪薬科大学薬学部,⁸立命館大学産業社会学部,⁹長崎大学薬学部)

「はじめに」・・・明治五年に刊行された理礼氏薬物学は、アメリカの戒施理礼著、備後福山の小林義直訳の一五冊一七巻の書物である。今回、本書の解釈本を検索したが、見あたらなかったので、第二巻全文を解読し紹介する。

「方法及び結果」・・・第二巻は、収斂薬を扱っている。以下概略をまとめる。「収斂薬は、生体に用いた場合、繊維を収縮し強壮効果を現すため、強壮薬として使用可能である。食欲増進効果もあるが、局所的繊維質が急激に収縮を起こすところが、普通の強壮薬とは異なる。強壮薬も、繊維質を収縮しないことはないが、その効力は緩慢である。収斂薬を使用すれば、分泌を減少させ、出血を止め筋繊維を緻密にし、筋系の弾力を増強し、血管を収縮する。局所に使用して血を止める効果のあるものを止血薬という。この作用は血管を収縮し、血中のタンパク質を凝固沈殿させる性質があるからで、内服し、血中に移行すると、効果が弱るといふが、外用する者と効果は同じであるとヘツラント氏が言っている。

(中略)熱病や分泌過多といった実質性の障害や、食欲のない者には収斂薬を用いてはならない。薬品としての収斂薬は、口の中に入るとざらつく感じがして、唇舌齒齦が渋くなる。この性質は収斂薬の性質で、鉱物等では収斂薬かどうかを試す方法で、これ以外化学的試験法はない。収斂薬は植物由来のものが多いが、その収斂性は全てタンニンが原因である」とし、以下鞣酸、没食子酸、櫟皮、没食子、阿仙薬、吉納、刺達尼、蘇木、日刺扭謨、黒覆盆子、玫瑰花、烏華烏尔斯、鹿蹄草、石榴皮、篤尔綿室刺、柿、明礬、鉛、酸化鉛、炭酸鉛、次酢酸鉛水、沃顛鉛、硝酸鉛、鞣酸鉛を扱っている。

「考察」・・・西洋医学は化学薬品という先入観があるが、紹介されている薬品は植物などの生薬由来が多く見られる。天然薬物を新薬開発の材料とのみ見なす前段階の状況が興味深い。